

2023年2月1日

## 神戸学園都市 YMCA こども園 2月えんだより

### 2月の聖句「ここに愛があります。」

<ヨハネの手紙Ⅰ 4章10節>

新聞のスキー場だよりでは一部閉鎖が目立つような穏やかだった冬から、一気に厳しい寒さの冬が訪れ、全国各地で大雪や寒さの影響が出ているようです。この寒さの恩恵も大切にしつつ、困難を共に乗り越えていければと思います。

今から40年余り前の春、東京大手町のオフィス街にある小さな池から、少し離れた皇居のお堀へ引越すカルガモの親子がマスコミに大きく取り上げられました。都会の真ん中で、様々な危険に遭遇しながらも懸命に親ガモの後を追う子ガモの姿に多くの人々が心を打たれました。その後、他の場所の親子ガモの引越しも頻繁に取り上げられるようになり、今ではすっかり春の風物詩の一つとなっています。なぜこのような「引越し」があちらこちらで見られるのでしょうか。カルガモは、渡り鳥ではないので、日本で卵を産んでかえます。この卵を天敵から守るため、隠すのに適した水辺の草むらなどに産卵し、ヒナが生まれると、餌をとりやすい場所へ移動するようです。けれども、この引越はカルガモたちにとって命がけです。都会の町中を移動する際に交通事故にあたり、カラスや猫などの天敵に襲われたり。そのような危険な状況の中でも、親ガモは懸命に子ガモを守っています。時には、自らの命の危険も顧みず、襲い来る天敵に立ち向かう姿も見られます。このように親が我が子へ注ぐ愛を「無償の愛」と表現することがあります。何も代償を求めることなく注がれる愛。神様の私たちへの愛も時に「無償の愛」と言われます。この親ガモの愛は本当に「無償の愛」なのでしょうか。春のシーズンには多くの親子ガモが子育てにより良い環境を求めて引越を繰り返します。その最中、時によっては、他の親子ガモの親に子ガモが襲われることもあるのです。親ガモの愛は「我が子」に限られたものなのです。自分を親と認め、懸命にあとをついて来てくれる愛しい「我が子」であるが故に注がれている愛なのです。

神様の愛はどうでしょうか。親子だから、家族だから、友人だからといった理由があつての愛ではなく、たとえ背かれても、裏切られても愛し続ける。これが神様の愛なのです。罪深い私たちを赦すことの贖いとしてイエス様をこの世に遣わし、十字架にかけられたのです。私たちの罪を知りながらも尊いものとして愛してくださっています。ここに神様の愛があります。

カルガモの親子が世間で話題になったころ、長田の地にあったYMCAの柱に「我が子への愛を世界のどの子にも」という言葉が記されていました。神様の愛を知りつつ、少しでもその愛に近づけるように、すべてのものに愛を注ぐ歩みを続けられるように祈りたいと思います。

2月	乳児 (0,1,2 歳児)	幼児 (3,4,5 歳児)
月主題	いっしょに	力あわせて
月の願い	*友だちや保育者と言葉を交わし、関わりを楽しむ中で、「いっしょっていいな」「たのしいな」と喜びを感じながら過ごしてほしいと思います。	*友だちと一緒に過ごす中で、考えを出し合い、工夫し、助け合い、1人ひとりが力を発揮して遊ぶ経験をしてほしいと願っています。
讃美歌	「つくしのように」 幼児讃美歌 50	「きゅうこんのなかには」 こども改 135